
機動戦士クロスオーバーガンダム

handman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士クロスオーバーガンダム

【Nコード】

N0412Y

【作者名】

handman

【あらすじ】

時はC.E.70……地球連合とプラントは緊張状態にあった。そして一発のミサイルによってすべてが始まった……機動戦士ガンダムSEEDの世界を舞台に初代ガンダムとZOIDSをクロスオーバーさせたパラレルストーリー！！君は、生き残ることが出来るか……？

モバスペBookに掲載されていた物を再編集した作品です

序章

「僕は僕の秘密を今明かそう、僕は自然のままに生まれた人間ではない……」

人類初のコーディネイター、ジョージ・グレンの言葉だ。彼はこの言葉のとおり普通に生まれた人間ではない。生まれる前の

胎児に遺伝子調整を施し、常人よりも優れた知能と身体能力、病原菌に対する高い免疫性を併せ持った人間だったのだ。

彼の言葉に魅力を感じた人々は我先にと自分の子供をコーディネイターにしようとした。後世で俗に言われる『コーディネイターブーム』の到来である。この期間にコーディネイターの人口はナチュラルのそのの70%くらいまで跳ね上がった。

しかし、コーディネイターの登場は良い事ばかりではなかった。人間は自分より優れたものを憎むという性質を持つ。全てにおいてナチュラルよりも優れたコーディネイターを恐れた人々は彼らを宇宙に上げ、地球から少し離れたラグランジュポイント5に宇宙コロニーを建造。以後、コーディネイターはそこに住み、兵器の開発を地球の一部の理事国家から搾取をされる立場となった。

当然、彼らはこれに反発。独立を求めて何度もナチュラルとコーディネイターの話し合いの場がもたれたが、いずれも破談に終わり、そのまま両者は緊迫状態になった。

そしてC・E70、後に”血のバレンタイン”と呼ばれる惨劇。プラントの食料コロニー”ユニウス7”に放たれた一発の核ミサイルによって”ユニウス7”は壊滅。約24万3000もの死者を出す事件が両者の緊張を破り、プラント理事国が地球連合政府に宣戦布告を行い、開戦した……

序章

漆黒の宇宙空間を円筒形のコロニー「アイランド・イフィッシュ」が進む。周囲には戦火の光。現在この宙域はザフト軍の一大反攻作戦“ブリティッシュ作戦”の支配下にあるのだ。ザフト軍の主力量産MSジンが数機、宇宙を駆ける。前方の連合軍艦隊を狙ってそれぞれ隊列を崩す。その中の1機が前方のサラミス級巡洋艦を狙う。右手の重突撃機銃を構えて発砲。銃弾はサラミス級のミサイルポッドに命中、内部の爆薬に引火して大爆発を巻き起こす。しかし、大破には至らず反撃のビームと艦載機の連合の支援モビルポッド、ボールが2機飛んできた。ビームを軽くかわし、ボールに肉薄する。交差する一瞬に重斬刀を一闪、ボールは沈黙する。もう一機が旋回して横から突進してくる。こちらの機体は標準の180mmキャノンではなく120mm連装機銃を装備していた。銃撃をかいくぐり照準、トリガーを引いた。しかしモニターに現れる弾切れのサイン。歯噛みしてマガジンチェンジを行う。その間もボールは攻撃を続けており、中破したサラミスは退避行動に入っている。

「逃がすか！」

ブースターをフルスロットルに、ボールに突撃する。あわてたボールは回避運動を取りつつも機銃を撃とうとするが、弾切れ。しかもこっちはマガジンチェンジを行う機能はない。ジンが近づくのを見守って見ているしかない。そしてジンは近づいた所で重斬刀を一闪。またしてもボールを切り裂いた。踵をかえしサラミスに向かう。サラミスは最大出力を出していたため半ば戦線を離脱しかけていた。しかしジンは容赦なく追撃を駆ける。サラミスは慌てて迎撃を行おうとするが、武装のない底部から接近したために攻撃が当たらない。それを尻目に先ほどの攻撃で空いた大穴に弾丸をお見舞いする。内部に大きなダメージを受けたサラミスは爆発を起こし、完全に沈黙した。

爆風にあおられた機体を立て直す。近くの敵は駆逐されたようで、周囲には機体の残骸や友軍機しかいなかった。これ幸いと息を整える。そこに通信が入った

『調子はどうだ、リーゼル？』

背後を振り向くと一機のジンがこちらに飛んでくるところだった。そばまで来ると足のバーニアを吹かして止まった。

「アートルか？」

『おう、それで戦績はどうなんだ？』

問われてリーゼルは悩む。現状の戦績は戦艦一隻にポールやコアフアイターなどの戦闘機が数機ほどしかない。ナチュラル相手にこの成果はあまり芳しいとは言えなかった。

「まだほんの少しだよ、そっちはどうなんだ？」

『おう、こっちは上々だ。さつきも…』

アートルが続きを言おうとしたところにコックピットに警報が鳴り響く。

『！？』

即座に機体を立て直し、臨戦態勢になる二機。そこに真上からメビウスが二機襲いかかった。

『遅い！』

「負けるか！」

対してジンは弾けるように分散する。リーゼル機は重突撃機銃を乱射し、アートル機は重斬刀を抜いて接近する。リーゼルに狙われた機体は懸命に銃弾から逃れようとしたが、左のブースターに被弾した。機体のバランスが崩れ、近くのデブリに激突して動きを止める。もう一機はレールガンを撃つが軽くかわされ、すれ違いざまに真っ二つにされた。

『ちよろいちよろい』

「これで四機目だな」

『まだそんなもんか？頼むぜ、このままじゃ俺だけグラディエイターになっちまう』

「ははっ、頑張らなきゃ……」

突如、リーゼル機のブースターが被弾した。続いて数発の銃弾がアートル機の頭部を貫く。

『敵襲？ いや…撃ちもらしか！』

体勢を立て直す。攻撃してきたのはリーゼルが撃ったメビウスだった。デブリにぶつかっただけで破壊されていなかった機体が動けないなながらも反撃をかましてきたのだ。さらにメビウスはバルカンを放つ。

『くそっ、照準調整が狂ってやがる！』

「姿勢制御出来ない！」

そうこうしている間にもメビウスはバルカンを撃ってくる。さらに姿勢制御ブースターで体勢を立て直しレールガンのチャージを始めた。

(まずいっ！)

焦るが機体は思うように動いてくれない。そしてレールガンの光が大きくなっていき

メビウスが降り注いだ銃弾の雨に破壊された。

「お前は……」

『無様だ……』

『せっかく助けてあげたのに、素直じゃないねえ』

体勢を立て直した二機の前に機体が現れる。緑と黒のカラーリング、丸みを帯びた頭部、右肩のスパイクアーマー、左肩のシールド、モノアイが赤く光る。ザフト軍独立機動部隊『グラディエイター』に所属するMS「ザク」である。

「久しぶりだな、クリス」

『おう、リーゼルちゃんもな』

「ちゃんを付けるな！」

リーゼルの挨拶にザクのパイロットのクリス・レイストンが答える。
しかしアトールは浮かない顔だった。

『アトールも久しぶり』

『お前に助けられるなんてな』

『俺だつて何時までもお前の後を追っかけてるわけじゃないぜ。それにしても……』

ザクがリーゼル機の方を向いた。

『リーゼルちゃんの腕は相変わらずのようだな』

「悪かったな。未熟でさ」

『自覚があるなら腕を磨け。お前はいつも……』

しかしアトールの説教は突如送られた通信に妨げられた。

『現宙域で作戦行動中の全ザフト機に到達！ 連合の戦艦が一隻、防衛網を突破しコロニー”アイランド・イフィッシュ”に接近中！ 目的はコロニーの核パルスエンジンを制御して軌道を変更するものと推測される。近くの友軍機はただちにこれを撃破、軌道を修正せよ。なお、対象との交戦において連合のものと思われるMS三機を確認。内一機は撃破。注意せよ』

『連合製のMS？ 面白い』

『面白がつてる場合か！ アラスカから狙いを外されたら大変だ。』

『急ぐぞ！』

命令文を読んで楽しそうなクリスをアトールが諭した。リーゼルが驚く。

「軌道修正なんてできるのか？アトール！」

『俺にはできないが……』

『俺に任せろ！』

言いよんだアトールにクリスが割り込んだ。

『そういうことだ。それにここで戦果をあげればグラディエイター』

隊への道は近付くかもよ?」

「そうだな・・・」

照準調整を終えたアートル機とブースターの応急修理を済ませたり
ーゼル機を従えて、クリスはコロニーへと向かった。

地球連合のドレイク級護衛艦”ドリアード”は”アイランド・イフ
イッシュ”の河へ近づいた。河と言ってもコロニーのそれは光をと
り入れるための大型の窓であり、普段は自動修復能力を備えた強化
ガラスがあるものの、今はすべて割れているためにドレイク級程度
の艦なら容易に中へ入ることが可能だった。そのままコロニーの動
力部へと艦を進め、そして核パルスエンジンの制御室を制圧した。
しかし、そのとき”ドリアード”のレーダーに識別不明の三つの機
影が映った。

「あれか!」

戦闘宙域のはずれ、今もなおゆっくりとその巨体を地球へ進めてい
るコロニーの近くへ三機はたどり着いた。

『制御室はコロニーの向こう側の端だ』

クリスの案内に従って河からコロニー内部へ侵入する。

『ストップ!』

しかしいきなりアートルが制止する。続いて機内の警報が鳴り響く。

「ミサイル!？」

ーゼルは素早く機体を回避させる。それまで機体のあった場所を
数発のミサイルが通過していった。

前を見ると連合のドレイク級護衛艦がコロニーの端の制御室へ通じ
るエリアを陣取っている。今のミサイルはあそこから発射されたも
のようだ。さらに機関砲による砲撃が浴びせられる。それを交わ
す位置、艦の上部に飛びながらーゼルはアートル達と通信をとっ

た。

「敵はドレイク級一隻だ」

『みればわかる。クリス、報告のあったMSは発見できたか？』

アトール達の乗っているジンよりもクリスの乗っているザクの方がレーダー範囲が広いのだ。

『今こつちへ向かって来ている。早いぞ』

「望むところだ」

クリスの報告を聞いたリーゼルは興奮を抑えきれなかった。今までの連合の主力機は戦闘機だったために対モビルスーツ戦闘は模擬戦でしか経験がなかったのだ。

『リーゼル、あまり浮かれ過ぎないようにな』

絶妙のタイミングでアトールが諫める。それでもリーゼルは興奮していた。

「任せておけ！」

そうしている内に敵のMSがカメラで確認できる距離まで接近していた。まず一機、機動性を主眼に置いているようで機体背部に大型のスラスターとプロペラントタンクを装着している。武装はマシンガンと背中にアンテナのような棒を装備していた。やや遅れてもう一機が姿を現す。こちらは後方支援用の機体のようで右肩にキャノン砲を装備している。どちらの機体も白をベースに胸部や前腕部を赤く塗ったカラーリングをしていた。

『来るぞ、散開！』

アトールの号令でリーゼル達は敵機を迎え撃った。

迫る二機に対してリーゼル達三機は二手に分かれた。リーゼルとアトールは先行する素早い機体に、クリスはキャノン砲を背負った機体へと向かう。

素早い機体は二機のジンが向かってくるのを見てマシンガンを構えた。迫る銃弾を交わしてリーゼルは重斬刀を抜いて斬りかかる。敵

機はそれを左へ身を捻って交わした。そこへアトールの放った銃撃が襲いかかったがそれをシールドで防いだ。そこに背後からリーゼルが再び斬りかかる。素早い不意打ちには対処しきれず重斬刀は左肩に命中したが、斬りおとすまではいかなかった。切断された電気系統の火花を弾けさせながら敵機は二機と距離をとった。

一方クリスは放たれるビームの砲撃に中々敵機に近づけないでいた。そこへさらにドレイク級から放たれたミサイルが迫る。

「くそっ！こんなことになるならバルルスを持ってくるんだっ！」
悪態をつきながら機体を逃がす。ミサイルはザクを追ったが、コロニーの中心を支えるシャフトに阻まれた。そこに下から砲撃戦機が迫る。ビームが左肩を掠り、スパイクアーマーが熱で溶けだした。シャフトの陰に隠れながらクリスはマシンガンを乱射する。砲撃戦機は避けようとするが左足に命中した。動きが鈍った所にさらに追いつ打ちをかけようとしたが、弾が出ない。モニターを見ると弾切れを起こしていた。ザクの弾切れに気づいたのか動きを止めていた敵機はビーム砲を向けた。

「まっずっ！？」

しかし予期していた光は来ない。敵機も予想外だったようで動きを止めていた。クリスは今のうちにマシンガンのリロードを行おうとマガジンに手を伸ばす。しかしそこへ何を思ったかバックパックを強制排除した敵機が迫った。シールドの裏からナイフを抜きだして振りかぶる。リロードを終えたクリスは銃を向けようとしたが間に合わず、咄嗟にザクの左腕を構えて楯にする。そこにナイフが命中した。しかしクリスも負けてはいない。リロードの終わったマシンガンの銃口を相手の腹に押しつけ、

「もらったああ！」

トリガーを引き絞る。120mm弾が相手のコックピットを貫いた。動きが止まったところに腹に蹴りをいれた。腕に刺さったナイフから手を離して砲撃戦機がコロニーの大地へと墜ちていく。眼下にあったビルを押しつぶして沈黙する。それを確認するとクリスはドレ

イク級の破壊を後回しにし、仲間の援護をするために飛び去った。

もう一機に向かったりリーゼル達は思うように戦えないでいた。敵機が速いのだ。それもただ速いだけでなく、時折有人には過酷な動きをすることさえあった。

『無人機か！？』

それはそれで厄介だ。機械は人間にしか出来ない考えを持たない分戦い方を読みやすいが、代わりに肉体という限界を持たない。つまりある程度までのGを無視した戦闘機動をとれるということだ。

「この野郎！」

アトール機が突撃銃を撃つ。しかし敵機はUNBAC機動を混ぜた動きで難なく回避して撃ち返してくる。

その隙をついてリーゼル機が死角から突撃銃を撃った。それも回避した敵機は左腕をリーゼル機に向けた。楯の先端から三発のロケットが発射される。しかしリーゼル機は難なくかわし、ロケットはコロニー中央のシャフトへ命中した。

「次は外さねえぞ……」

慎重に狙いを定めるリーゼルだったが、突如機体に震動がはしる。

「何だあ！？」

『落ち着け！落下したシャフトの一部が当たっただけだ。機体ダメージをチェックしろ』

アトールに窘められて慌ててチェックプログラムを起動する。ダメージ箇所はバックパックの一部で他は特に問題なかった。

それを伝えるとアトールは安心した様子で、

『よし、あいつを仕留めるぞ』

「だが動きが早すぎる。時間もそうないしどうすれば……」

『銃がダメなら接近戦に持ち込めばいいのさ。俺がアシストするか一機に近付いて重斬刀を叩き込め』

「了解！」
交信が終え、リーゼル機が腰に差した重斬刀を構えた。アトール機の右足に装着されたパルデウス三連装短距離誘導弾発射筒を発射する。三発のミサイルが敵機に向かう。相手は避けたが、不意を衝いて突っ込んできたリーゼル機はかわせなかった。

咄嗟に左手の盾で受け止める。さらにリーゼル機は剣を構え、横薙ぎに振るった。しかし敵機もただやられてはいない。右手を背中に伸ばし、アンテナのような棒を引き抜いた。棒の下部からはプラグが伸びていてバツクパツクにつながっている。リーゼルは一瞬アンテナとは明らかに違うそれに戸惑ったが、構わず剣を振るった。しかし、次の瞬間驚くべきことが起こった。敵機が持つ棒の先から光が収束し、リーゼル機の重斬刀を受け止めたのだ。

「何い！？」

リーゼルは見たこともない武器に驚いた。それは徐々に重斬刀を溶かしながらリーゼル機に迫ってくる。リーゼルは咄嗟に間合いを取ろうとしたが、そこに敵機の左腕がジンの頭をつかんだ。逃がさんと言わんばかりに。

「リーゼル！」

敵機の上に回り込んだアトールが突撃銃を掃射する。何発かの銃弾が敵機のバツクパツクに命中し、爆発が起きる。それに押されて敵機がバランスを崩す、と同時に右手の武器から光が消えた。

「うらあああ！！」

刀身の半分まで溶かされた重斬刀を振り回しリーゼルが叫ぶ。剣は今度こそ相手の胴体を薙ぎ払った。二つに分かれた機体は落下し、爆発した。

「大丈夫か、リーゼル？」

「…俺に当たってたらどうするつもりだ…」

「…俺の腕を信じるよ」

「…つつこむ気力もねえよ…」

無意味な受け答え。しかし今の二人にはそれがお互いを確認する方法だった。

『二人とも、無事か?』

『クリスか? なんとかな』

『それは良かった。だがへばっている暇はないぞ。もうひと頑張りだ』

『ああ』

合流した三機はともにコロニーの端、工業ブロックへ向かった。

コロニーの外壁近くの壁には相変わらずドレイク級が横付けされていた。いや、今や作業は終了したようでゆっくりと動き始めている。そこへ三機のMSが強襲した。

『てつとり早く済ます。アートルは左舷下のミサイルポッドを狙え。俺は上のポッドを狙う』

『俺は?』

『リーゼルはマシンガン落としたろ。黙って見ている』

『…了解』

向かってくる二機のMSにドレイク級は必死の抵抗を見せた。横合いから接近する鉄器をけん制するために機関砲を掃射し、急速に回頭しようとする。しかしジンとザクの方が早かった。容易く接敵した二機は惜しげもなくここぞとばかりにマシンガンの弾をドレイク級のエンジンポッドにお見舞いしたのだ。弾薬はポッド内部のミサイルと推進剤に引火、大爆発を起こした。いきなりの爆発に艦体はバランスを崩し、右側の壁に激突。艦橋を押しつぶされ沈黙した。

『一丁上がり! 弾からっぽだぜ』

『気を抜くな。まだコロニーのコントロール修正が残ってる』

『そうだったな。さっさと終わらせてビールでも飲もう』

『……それは無理な話だな……』

上機嫌になったリーゼンを遮るようにアートルの沈鬱な声がかかる

「どつという意味だ？」

「……見れば分かるだろ……」

「え？……あ」

見れば未だ煙を上げているドレイク級が先ほどまで接舷していた港口を押しつぶしていた。

「こりやだめだ……」

「一旦宇宙に出て宇宙港側から侵入する手段もあるが……時間がないだめだな」

「作戦失敗か……」

落胆する一同。そこに作戦終了の一報が入った。ザフト軍はこれ以上のコロニー防衛を諦め、撤退することだった。絶対防衛ライオンはすでに過ぎたためにコロニー落下は確実に判断したのだろう。

「撤退するぞ、二人とも」

「了解……」

アトールとクリスの機体が反転する。リーゼル機もそれに倣おうとしたところで突如バツクパツクが小さく爆発した。

「大丈夫か！？」

アトール機が手を伸ばす。しかしそこに銃弾が襲いかかった。沈黙していたはずのドレイク級の唯一生き残った機関砲からの射撃だった。

「野郎！」

ザクがマシンガンを艦隊に向ける。しかし数発撃った所で弾切れを起こしてしまった。

「くそっ！」

腰を探るが予備のマガジンももうなかった。それを見たリーゼルが叫ぶ。

「大丈夫だ、先にいけ！」

「バカ、置いて行けるか！」

すかさずアトールが叫び返したがリーゼルは食い下がった。

「あいつを潰したら後から追い付くよ。いいから行け！」

『しかし……』

『時間がない、アトール行くぞ。リーゼル、必ず帰還しろよ』

「もちろんだ。こんな所で死ぬつもりは毛頭ない」

それだけ聞くとザクはバーニアを吹かし、離脱していった。アトールは迷っていたが、『必ずだぞ』と呟くと飛んで行った。

「さてと……やりますか!」

リーゼルは呟いてジンを地面に降ろした。機関砲は艦の上部に設置されており、ここからなら仰角が足らずに狙えないからだ。そしてドレイク級の第二艦橋は艦底部にある。ここからでも人影が見える。リーゼル機は刀身の溶けかかった重斬刀を構え走り出した。一瞬だけバーニアを吹かし加速する。上を仰角の足りないにも関わらず撃ち続けている機関砲の弾が逸れていく。ある程度近づいた所でバーニアを全開にした。機体が敵艦へ飛んでいく。

「おらああああ!!」

重斬刀が狙い変わらず第二艦橋を貫いた。と、推進剤が切れ機体が落下する。今度こそ沈黙したドレイク級の下でジンは尻もちをついた。

コックピットの中でリーゼルは笑っていた。敵を倒した喜びではない。あんな船、いつもだったらすぐに倒している。彼が発しているのは乾いた笑いだった。

「悪いな、アトール。クリス。約束は守れなさそうだ……」

推進剤が切れた。それはつまりコロニーからの脱出が不可能になったことを意味する。バッテリーの容量はまだ余裕があるが跳べなくては頭上の脱出口へと行けないのだ。打つ手なしだった。

「こんなところで終わりかあ……」

死が目前に迫ったというのに自分でも不思議なほどにリーゼルの心は落ち着いていた。視線が壁に張られた写真へと向いた。

そこに映っている男女。とある農業コロニーの湖のほとり。釣り上げた魚を手に笑う男女三人。失われた日々の思い出。弱々しい微笑みを浮かべたリーゼルを急激な振動が襲う。軌道変更を諦めた地球連合艦隊によるミサイル攻撃が開始されたのだ。震動はさらに増し、爆発によって空いた穴からミサイルが飛び込んできてさらに内部を蹂躪する。リーゼルは穴から何とか逃げられないかと機体を動かそうとしたが、その時内部に飛び込んできたミサイルがコロニーの壁に直撃、崩落した破片がジンのモニター一杯に映る。

そして何もわからなくなった。

コロニーが落ちていく。数百万人の命の抜け殻を抱えたまま。連合のミサイル攻撃はなお続く。やがて軌道をわずかにずらされたコロニー”アイランド・イフィッシュ”、が数時間後に当初の目的であるジャブローを外れ、オーストラリア大陸のシドニーという大都市を直撃、さらなる犠牲者を出すことを知る者はまだ誰もいない……

暗い部屋。ザフト軍の一般兵士に与えられる部屋は基本的に相部屋だ。しかし、今は一人しかいなかった。その者は軍服のままベッドの上で寝ている。頬には涙の跡があった。寝返りをうって寝続ける。ベッド脇の小机に手紙が二通のついていた。クシャクシャに握りつぶされた一通にはこうある。

移動辞令：汝、アトール・ブライカー曹長、ザフト軍特務部隊グ
レイエイター隊への移動を命ズ

もう一枚の方、いくつもの染みがある紙にはこうあった。

戦死者リスト

M I A 認定 リーゼル・リバー 二階級特進により 最終階級：少尉

第一章 始まり

ザフトはプラント理事国の保有する軍隊の総称である。設立当初は政治結社だったが地球連合の圧政に対抗するために徐々に力をつけ、パトリック・ザラ国防委員長によって軍隊へと昇格した。

そして現在ザフトの部隊は三つに分けられる。一般の兵員による志願制の通常部隊。一般兵の”緑服”とアカデミーエリート”赤服”が所属する部隊である。もう一つがFAITH、プラント国防委員会直属の特務隊であり、評議会議長の勅命によって選出されるエリート部隊である。そして最後にプラント兵器開発局直属となる実験部隊グラディエーター隊である。これは当初開発した兵器のテストパイロットのための隊だったが、開発局長の要請によって貴重な試作兵器を守る護衛を増加した結果、組織が大型化してしまった。通常の兵器のテストの他に連合の新兵器の威力偵察や破壊、または一般の部隊に交じっての作戦行動も行う。選抜は一般部隊の兵の中から特に成績がいい者を引き抜くか、所属している隊員の推薦によって決まる。その所属の特性のためにエース以外の隊員にもペイントや特殊装備が許されている場合が多い。

第一章 始まり

「ブリーフィングを始める」

薄暗い作戦室に声が響く。モニターからの光にラウド・クエスタ少佐の顔が照らされている。室内にはパイプ椅子に座った男女が十数名。服装は様々で”赤服”や一般兵である”緑服”の他に研究員であることを示す白衣を着ている者もいる。

「今回の作戦は非常に機密性の高い作戦である。よってこのことは私と開発局の一部、そして諸君しか知る者はいない」

ラウドの真剣な面持ちに隊員たちの顔が引き締められる。

「今作戦の目標は、連合が新しく開発したMS、通称”G”を強奪することである。これらの機体は連合の最新技術がつかわれており、我々のジンはおろかザクすら凌ぐ性能であることが予想される」

そういうとラウドは次に作戦の詳細を話し始めた。強奪目標は六機であり、すでに三機がコロニーに運び込まれており、残りの三機は二つに分かれてコロニーへと輸送されること。こちらは隊を二つに分け、これに対応する。使用する艦艇は第一部隊がナス力級高速宇宙戦闘艦”ゲイテ”、”シェイクスピア”第二部隊がムサイ級軽巡洋艦”アルベルド”、”リガルド”チベ級重巡洋艦”アルマーク”

輸送艦に突入する部隊編成を読み上げたラウドは最後に締めくくった。

「第一目標は強奪だが、仮に強奪不可能と判断された場合、どんな手段を使ってもいい。破壊しろ。とくにデータの詰まっている頭部とコックピットを時間の許す限り徹底的に破壊するんだ。何か質問は？」

”赤服”の隊員が手を挙げた。

「予想される敵は？」

「大方がボールやメビウスのような戦闘機と推測されるが、半月前のブリティッシュ作戦で確認された試作MSの出現もありうる。各MSパイロットは万全の備えをするように。他に質問は？」

今度は誰も手を挙げない。それを確認したラウドは一つ頷いてブリーフィングの終了を宣言した。

アトールは無重力ブロックの通路を壁の移動用グリップを掴みながら考えていた。忘れもしないブリティッシュ作戦、あれから半月

がたった。その間にいくつか重要な出来事があった。エイプリル・フル・クライシスによる反コーディネーターの激化。エンディミオンクレーターでの戦闘で地球連合がサイクロプスを使用したこと。オペレーション・ウロボロスによってマストライバーのある地球上の連合の基地であるカオシユンを制圧、パナマとビクトリアのマスドライバーをかるうじて破壊し、それに乗じて鉱山基地オデッサを占拠、地球における鉱物資源を確保したこと。実に色々なことがあった。しかしこれらの戦いにはグラディエイター隊は殆ど参加していない。関わりがあるとすれば地上戦用MSであるグフや水中MSのズゴックやグリーン、ゾノなどの開発でテストパイロットを行った程度だ。それが今回の作戦では直接地球連合の戦力を叩ける。興奮しないはずがなかった。

「アトール！」

呼び声に振り向くとクリスが後ろから流れてきた。

「どうした、クリス？」

「いや、お前突入部隊だろ？変に気負ってないか心配でさ」

クリスの言葉にアトールがうつむく。それを見てクリスは思い出していた。テストパイロットの特性上なんだか地上に降りたことはある。連合の偵察部隊と出会ったことも。そのたびにアトールは迎撃に飛び出していった。偵察の戦車なんかはMSが負けるわけはない。そこは心配なかったが、立ち向かっていくアトールはどこか危うげに見えたのだ。

アトールはクリスの視線に顔を上げ

「大丈夫だ。それよりお前こそ上手くバックアップしてくれよ」

「ああ……任せとけ」

そこで言葉を交わして二人は別れた。クリスは遠ざかるアトールの背中をしばし見つめていた。

その四隻の船はYの字の隊列をとって宙域を進んでいた。いずれも

通常のカラーリングではなく熱量の放射を抑え、電波を攪乱させるステルス塗料を施されている。先頭の二隻は地球連合の戦艦ネルソン級。火力もさることながら少数ではあるが戦闘機やMAを搭載することも出来る優れた船だ。さらにその二隻にやや頭を挟まれるようにして続くのは輸送艦であり重要な”積み荷”を抱えるコロンプス級。そして殿を勤めるのが旧式ではあるが連合でも最大の火力を誇るマゼラン級戦艦である。

慎重に、かつ速やかに移動する彼らは前方に小さく見えてきたコロニーを指していた。しかし、目的地が見えて肩の力を微かに抜いた彼らをあざ笑うかのように敵襲の警報が鳴り響いた。

前方を進むネルソン級”ヤクシニー”の艦長ブライアン・アダムスは取り乱すことなく艦橋に入るなり状況を報告させた。

「接近する機影ニ！速度からザフト軍ナスカ級と思われまます！」

「縦列防御！本艦は前進し”ハリティー”の射線を確保せよ！」

「敵艦距離350、ビーム来ます！」

「はったりだ。指示あるまで撃つなよ！」

その通り、射程距離ぎりぎりからのビームは掠りもせず船団の真上を通過していった。”ハリティー”もそれを見越していたようで冷静に迎撃体制に入っていたが、後続のマゼラン級”アレス”は違ったようだ。自艦のすぐ上を通過した光に怯えたのか反撃のビームを発射し始めた。

「”アレス”に通達！直ちに撃ち方やめだ！発射位置を特定されるぞ！」

ブライアンが命じた刹那、一条の光が放たれた。正確に機関部を貫いたその光は間を空けることなく”アレス”の船体を爆散させた。

「くっ！敵艦が十分な射程に入り次第砲撃開始！艦載機は！？」

「整備中です。発進まで5分！」

「待てるか！砲撃で時間を稼げ！」

”ヤクシニー”の主砲が敵艦に向けられる。その様子を見ながら、ブライアンはどうしようもない不安を感じていた。

一発のビームが”ゲエテ”の左舷を掠り連装レールガンを吹き飛ばした。しかし”ゲエテ”は進路を変えずに真っ直ぐ突っ込んでいく。そのカタパルトが開き、リニアレールが展開する。そこから姿を現したのは一機の高機動型MS、ジン・ハイマニューバだった。手に130mm対艦ライフルを保持しているジンは、しかし発進せずに格納庫天井から伸びたアームによって機体を支えられていた。

「こちらクリス・レイストン、砲狙撃戦を開始する！」

ジンはライフルを構えた。130mm対艦ライフルはその名の通り対艦艦用ライフルだが、この距離では精密な射撃が難しく、射程距離も足りない。そのためにリニアカタパルトを利用して弾速と射程距離を無理やり向上させ、命中精度はクリスの腕に任せるというわけである。今作戦では素早い作戦遂行を目的としているために通常のような対艦戦闘では時間がかかるため、こういったやや無理のある作戦行動を取らざるを得ないというわけだ。

「食らいやがれ！」

かけ声とともにトリガーを絞る、発射された弾丸はリニアカタパルトの電磁力によって凄まじい加速を見せて手前に位置するネルソン級の艦橋を貫いた。さらに数発、次に主砲を貫いてネルソン級は沈黙する。

クリスは成果に満足するとライフルを下げた。それに合わせるように残ったネルソン級から重装型のボールが二機発進する。

「リール、そっちは任せませ」

『了解』

その通信と同時に”シェイクスピア”から一機のシグーが発艦した。背中のスラスタに装備された一對の重斬刀を抜き、ボールへ

と突っ込む。ボールがロケットランチャーで迎撃する。それを難なくかわしたシグーはすれ違いざまに重斬刀でボールを切り裂いた。残ったボールが必死にガトリング砲を掃射し、シグーを近づけまいとするも、通常とは打って変わって軽快な機動性を見せるシグーを捉えきれず、代わりに剣の錆となった。

そのまま勢いを緩めず、残ったネルソン級に肉薄する。両手の重斬刀を投げ捨て空いた右手で左腰に差した大型の剣を引き抜いた。掌に仕込まれたプラグが接続され、供給されるエネルギーによって刀身が赤熱する。ザクのヒートホークを基にした試作型の大型ヒートサーベルである。機銃による迎撃をかわし、シグーのヒートソードがネルソン級の右舷側を上から下へ縦に切り裂いた。艦底部のビーム砲が向けられたが、火を吹く前にそれごと艦底部に剣を突き立てたシグーは、次に左舷側を下から切り裂く。そして最後に艦橋部を薙ぎ払った。素早い連続攻撃に最期のネルソン級はなすすべもなく沈黙した。

「どうだ？新型スラスタの使い心地は」

「エンジントラブル起こしたわ。身軽なのはいいけどGが凄いわね。使いこなせる人は少ないんじゃない？」

「それでも上手く戦えてたじゃないか。戦果は十分だ。そのまま周辺警戒を頼む。俺もすぐに出るから」

『了解』

速度を乗せたナスカ級がただ一隻残ったコロンプス級を追い抜いた。反転して戻ってくる前にクリスのジン・ハイマニューバがコロンプス級の艦橋に近づいていった。

「コロンプス級輸送艦”ヨモツシコメ”の艦橋にジンのモノアイが点滅する赤い光が瞬いた。

「敵MSからのモールス信号です！読み上げます。『我、ザフト軍

グラディエイター隊也。直ちに武装を解除し貴艦の積荷を我々に明け渡せ。要求に従えば乗組員の生命は保証する。』以上!」

「何だと……!」

受け取り方によっては馬鹿にされたとも感じられる声明に艦長が激昂する。

「機銃用意!あのふざけたMSの返事に鉛弾をくれてやれ!」

艦長の命令にクルーが動き出す。そこにまた赤い光が瞬いた。作業に追われていたクルーは一瞬の信号を読み取れなかったが、それはこつという意味だった。

「残念だ」

次の瞬間、ジンの拳が艦橋を押しつぶした。

クリスのジンが”ヨモツシコメ”の左舷正面ハッチに近づく。腰の円盤型の物体を取り外しハッチに取り付けた。施設の分厚い隔壁などを破る際に使われる特殊な指向性を持たせた高性能爆弾だ。パネルを開き、ジンの指がパスワードを押ししていく。ジンが離れて数秒後、爆発がコロンブス級のハッチを吹き飛ばした。続いて気圧差によって内部の機材や連合の兵士などが吸い出されていったが、クリスはそれを気にも留めずジンを内部へと進ませた。

大量の資材やメビウス、ボールといった戦闘機などを運べるコロンブス級の中もこの船に至っては例外でがらんとしたスペースが広がっていた。しかし奥にこしらえられたハンガーにはこの作戦の最重要目標である物が安置されていた。

「こちらクリス、最優先目標を発見。人員を送れ」

『了解』

通信に続いて吹き飛ばされたハッチから続々とノーマルスーツに身を包んだグラディエイターの隊員達が入ってきた。

『作業時間は10分だ。かかれ!』

ラウドの号令で隊員たちが動き出す。それを尻目にクリスはコロンス級の外へ出た。そこにはエンジントラブルから回復したリールのシグーが周囲を警戒していた。

「異常は？」

『なし、現行宙域にはなんにもなし。いつも思っけどこつという警戒って退屈でしょうがないのよね…』

「真面目にやらないと隊長にどやされるぞ」

『だから表向きは真面目にやってるわよ、表向きはね。でも…』

クリスのコクピットに電子音が響く。リール機から今までのオープン回線ではなく特定の二機だけを繋ぐ秘匿回線のお誘いだ。クリスは内心呆れながらも回線を開いた。

『ちよつとは息抜きしなきゃやってらんないでしょ』

「お前も不良になってきたよな…初めて会った時はあんなにガチガチだったのに……」

『あの時はそれが正しいと信じてたからね。今は考えが変わったのよ。それよりあれの話しましょうよ』

「あれ？」

『”G”のことよ。クリスもテストパイロットに志願するんでしょ？』

「ああ…そりゃ、もちろんするさ。でも配備されるのはちよつと先になるだろうな。先に研究者たちがいろいろいじるだろうし」

『あー、何が配備されるのかな！X-303がいいなあ！』

「まだテストパイロットになってないのに皮算用かよ…」

『クリスは何がいいの？』

「秘密」

『ケチ』

「いいじゃねえか、どうせ適性を考慮されるんだ。大方X-103かX-303か…おっと無駄話は終わりだ。作業が終了したらしい」

クリスの言葉通り”ヨモツシコメ”から作業員達が引き揚げていく

ところだった。そしてハッチからX-103バスターとX-303
イジスが姿を現した。二機はそのまま”シェイクスピア”へ向か
っていく。

『リール、クリス、作戦は無事完了した。ご苦労だったな。このま
ま次へ向かうぞ』

『了解』

かくしてグラディエイター隊の新型MS強奪作戦は第一階段を終了
した。彼らはこの後、連合のコロニーへ向かい残りの機体を強奪す
ることとなる。そして、予期せぬ出会いを彼はすることになるだろ
う。それと気づかぬままに……

第1章 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0412y/>

機動戦士クロスオーバーガンダム

2011年10月30日23時18分発行